



会長兼理事
長谷川一敏

三水会会報

北里大学水産学部
同窓会会報

会長挨拶 (3A・長谷川一敏)

三水会設立当時を振り返って (1A・長屋 信博)

イタリア釣り紀行 (下) (環境生態学講座教授・井田 齊)

小林先生新たな出発を祝う会 (10A・中村 義幸)

関東地区親睦会に参加して (4A・高橋 利明)

平成9年度総会報告 (事務局)

見たい、知りたい、話したい



小林正典先生御夫妻 ('97. 4. 5)



Salmo trutta macrostigma ('96. 5. 21) 井田先生記

1997
No.1
Vol.34



会長挨拶

三水会会長 長谷川一敏（3A）

・三水会員の皆様には益々御健勝にて御発展の事とお喜び申し上げます。私は平成九年五月十八に開催されました「三水会定期総会」に於いて、役員改選により長屋前会長の後任としてバトンを引き継ぐことになりました。この紙面を拝借して御挨拶申し上げます。しかしながら職責の重大さを痛感致し身の引き締る思いで御座います。私は昭和五十三年増殖学科（病理学研究室）を卒業、現在、山梨県都留市にあります養鱈場に在職しております。

三水会は昭和五十一年の設立総会をもって学部同窓会として五番目に産声を上げました。今年度二十二期の卒業生をふくめると現在三五〇名の同窓生を抱える水産学部同窓会となっております。この十七年という歩みの中で築き上げてきた同窓会としての理念でもあります会員相互の交流、親睦という大きな柱を挙げ今後も使命遂行に全力を尽くす所存であります。

三水会には三つの主な業務があり

ます。一つには「三水会会報の発行」があります。毎年三月、九月の年二回、同窓生の動向、学部の現状、各種情報等を掲載したものをとおどけております。同窓会と会員各位との唯一キヤッチボールの場として、より充実したものと考えております。今後新たに会員の方々からの情報やご意見などを掲載するコーナーをもうけ会員皆様で利用していただく、たとえばOB会同期会情報、就職流通情報、又、準会員である在校生諸君のメッセージ等々より身近な交流の場としての会報作りを目ざして行きたいと思っております。

つぎに「親睦会の開催業務」であります。会員の六割が在住しております東京を取りまく関東地区の親睦会を毎年八月上旬に開催しております。自然の中、水と魚にこだわった、この親睦会は学生時代の三陸に思いをよせ、世代をこえた家族ぐるみの楽しい一日を多くの会員の親睦の場になっていきます。又、千葉県においては漁業関係者を対象とした千葉の

会、それに北海道では在住者による北海道地区懇親会が開催され地方における親睦の輪が広がっております。三水会では今後とも各地方での親睦、交流会等につきましては関係各位の御苦勞をねぎらいし御支援、御協力をして行きたいと考えております。又、現在水産学部には増殖学科五講座、食品学科五講座の計十の研究室があります。このうち四つの講座で研究室OB会としての活動が行なわれております。春期学会等で上京なされる恩師を囲んでのOB会が開催され毎回参加者も増えつづける輪が広がっております。現在、研究室OB会を企画、計画なさっている方、会報の紙面を通してアピールなさってはいかがでしょうか、三水会ではできるかぎり協力いたしますので、ご一報下さい。そして「すべての研究室にOB会を」目標に今後も努力を重ねていく所存です。将来の三水会を支える大きな石ずえであると考えております。

もう一つは準会員である在校生に対する後援活動があります。毎年学生との懇談会を通じて意見交かんを行ない申請のあります体育祭やいさゝり火祭に対する助成をつづけております。又、三水会設立当初より行な

つてまいりました「就職ガイダンス」も近年、就職事情の厳しさも影響し3年生を対照とした職業別のガイダンスを卒業生が講師となり体験談をまじえ、より明解なガイダンスを行なっております。水産学部の卒業生であれば、だれもが地理的ハンディを感じ情報のとばしさに御苦勞なされたと思います。これらに対し同窓会として何を求められ何が出きるのかを考え見守もって行きたいと思ひます。

水産学部も第一期の卒業生を送り出し二十二年が経過し草創期を過ぎ充実期に入っております。又、会員諸兄におかれましても実社会の中堅として、それぞれの分野において実力を発揮し社会に貢献する時期にさしかかり、多忙の日々をお過ごしのことと存じます。そんな皆様の期待にそえる様な新しい三水会を役員一同一丸となつて努力を重ねてまいります。最後に、長屋信博前会長の十七年におよぶ御尽力に感謝の意を表したいと存じます。私も初心に返り、一步一歩前進していく所存でございます。何卒よろしくお願ひ申し上げます。会員諸兄の御健康と御発展をお祈り致しまして御挨拶に代えさせていただきます。



「三水会設立当時を振り返って」

前三水会会長 長屋 信博（1A）

今、私の手元に昭和五十五年十月に発行された三水会会報の創刊号があります。設立当時のことを想い出してみようと書棚から取り出してきただけですが、「来年、大学に入学される新入生が生れた年に発行されたものなんだ」と思うと、三水会とともに過ごしてきた時の長さを改めて感じます。設立準備を含めると二十年近く、会長の職を何とか全うさせていただき、今は、ほっとした気持ちでおります。この間、何とかやっていた役員の方々、そして励まされたお言葉やご意見を寄せていただいた会員の皆様や先生方のご支援があったからこそであり、紙面を借りて厚くお礼申しあげます。

三水会の設立準備がはじめられたのは昭和五十三年頃でした。準備に携わったメンバーも何分経験のないことで、全学同窓会や先生方からご指導をいただきましたが、手探りで準備を進めました。特に、二代目の学部長を務められ、その後、学長、評

議員会議長の重責を担われた松浦文雄先生にはお世話になりました。同窓会のあり方や運営の考え方等について、ご経験を踏まえてお教えを受け、規約づくりを含めて親身にご指導をいただきました。また「三水会」の名付け親も先生です。三陸の「三」、卒業生、在学生、教職員の三位一体となった運営という意味を込めて命名していただいたものです。

三水会は、松浦先生をはじめ、多くの方々のご指導、ご支援を受けて昭和五十五年五月に創立総会を開催し発足しました。当時は、全学同窓会も学部同窓会をベースとする組織の基盤づくりの最中にあり、将来のあり方について、先輩である衛生学部や薬学部の同窓会の役員の方とよく議論をしたことを思い出します。医学部同窓会と三水会が加わり、徐々に現在の同窓会の体制ができ上がっていった時期でした。

創刊号の会報に載せた「三水会発足に想う」という拙文で、同窓会の運営について三つのことを書きまし

た。一つは、多くの会員の方々に利用される同窓会であること。二つ目が、人と人のつながりを大事にすること、三つ目が会員の協力に支えられた運営ということでした。どんなに立派な組織でも利用されないものでは、存在する意味はありません。時間はかかっても会員の方々の意見を聞きながら、なるべく多く方に利用していただける三水会となることを基本に据え、十分とはいえなかったかもしれませんが努力をして参りました。これを実践するため、事業等について多くのアイデアを出していただき、家族を含めたイベントの開催、職域や研究室OB会の開催支援等、幅広い会員の方に参加いただける企画を設立当初から進めました。また、今では多くの学部同窓会でやっている卒業生による就職ガイダンスも在学生とのつながりづくりということから当初から実施したものです。特に、会員同志が連絡を取り合う際の基本となる会員名簿の管理については、全学同窓会とも連携し、力を入れて参りました。

三水会の会員も、今では四千人を超え、一期生と今年卒業された方では二十年もの開きがあり、同窓会に対するニーズもことなることから、同窓会の運営も年が経つに従って、徐々に難しくなっています。会報を役員全員で封筒づめしていた頃が懐かしく思い出されますが、草創期を終えた新しい方向を模索していかなければならない新たな役員にとつて、多くの会員の方々からの声が何よりの力添えになると思います。私は今後、全学同窓会の運営に微力ながら精一杯の努力をして参りたいと思っております。同窓会も、その規模や時代に応じた会員のニーズ等に対応して変化していかなければなりません。既に四万人を超える大きな組織となった全学同窓会が、今後増え続ける会員のニーズにどう応え、大学の支援や社会に対する活動等をどう行っていくか、将来の方向を考える時期にあると思います。このため、学部同窓会との役割分担や地方支部同窓会のあり方等について、効率化や活性化の観点から議論していくことが重要と考えます。

今後とも、三水会の運営には側面から協力させていただきます。会員の方々の三水会に対するこれまでに増したご協力を背景とした新しい役員の方々のご活躍により、三水会がさらに発展することを心から祈念いたします。

イタリア釣り紀行(下)

環境生態学講座教授 井田 齊

。私たちにとって最悪な事件も起きた。旅も半ば、ひと息つこうということで島の南西端にあるタロスにあるフエニキア・ローマ時代の遺跡を見学した。駐車場は広く見通しも良いので私はナツヅグの中にも小物をいれ車の中において出た。観察者としては無くしてはならない野帳を

がら、また、自分の愚かさを呪いながら野帳を作り直した。教訓その三。先人の戒めはよく守ること。生兵法は怪我の元。

カリアリ大学の研究者がヨーロッパに棲むサケ科魚類としては最も南に生息する種としてブラウンマスの一地方亜種 *Salmo trutta macrostigma* の生態研究、種の保全を研究しているグループがあるとの情報を得て、そこを訪ねた。カウ教授と共同研究者達である。カウ教授の説明によればマクロスティグマはかつてはイタリア南部に広く生息していた種であるが現在はサルデニアに極限されているとのこと。サケ科としては珍しく停滞水、低酸素に強く、三十度を越す高温にも耐えられる亜種であり、サケ科魚類を学ぶ者にとつては極めて興味深い種である。しかし、一九〇〇年代にヨーロッパ大陸から別亜種 *Salmo trutta fatjo* が度々放流されたため交雑が進み、純系個体は得難いと話されていた。現在は保護水面に細々と生息しているとのこ

と。説明を受けた翌日、定期的な観測をするとのことで私たちも同行した。心地よいハイウェイをそれ曲がりくねった山道の脇を流れる沢はちよつと目にはわが国の溪流と大きな差はない。時には激しくしぶきをあげる瀧も、ゆつたりとした淵もあるがほとんどは灌木に覆われた小さな、本当に小さな流れであった。実際の調査は効率よく魚を捕り、測定後に放流するため電気ショックによる採捕であった。採れた魚は手早く体長・体重を測定し放流された。

喉から手が出るほど「下さい！」と言いたがった。生態系の保全の必要性を説く人間が保護水面の魚を標本にとは切り出せずに居たが、以心伝心、カウ教授は一個体を研究用に下さった。奥沢氏はほとんど收穫のない旅であったが、特殊なサケ科の標本を手でできた私の気持ちは子供がお菓子をもらったような気分であった。マクロスティグマの棲むブッシュや淵は釣り人の心を誘うに十分な雰囲気の間であったが奥山氏は科学とスポーツを混同することなく、竿を一振りもすることなく調査を見守った。

幻の魚とも言えるマクロスティグマに対面したあと、残す日程は一日。腕のほどを披露する場も無いまま奥山氏の胸中はどう思うと私の気持ちも複雑であった。帰つたらあれもこれも分析してみようと思う私と、ひよつとすると技術を披露する機会の無いまま終わってしまうかも知れない彼との二人。これまでの情報の不十分さ、不正確さに散々な目に遭つてきた奥山氏は、溪流魚としては多くの人たちを魅了するブラウントラウトの極めて珍しい亜種が保護水面でなく釣りが許されている水域にいると聞いてもほとんど感情を動かさなかった。マスが釣れると聞くと私は早とちりをして、マクロスティグマの標本が増える……とほくそ笑むが、彼の頭にはニジマスが思い浮かび懷疑的に受け取る。ほとんどその通りで釣りマニアの話は溪流ではなく、湖でのマスであり求めるマクロスティグマではなさそうであった。漸く信頼できそうな釣りクラブの会長に会つてまごうことないマクロスティグマの生息する場にご案内いただいたのは最終日の午後をとつて過ぎてからである。車がぬかるみにはまって脱出が危ぶまれるような泥道を進み車止めからおりて歩くこと三十分。ようやく奥山氏の本領が発揮される場に到着した。三時頃



タロスの遺跡('96.5.18)

には全く当たりは無かったが日が山の稜線に隠れる頃彼は見事に一尾目を釣り上げた。まさしく彼が言う魚達が生活史の中で餌を積極的に取り出すその時間であった。魚のいる場所と時、腕が漸く一致したのであった。案内してくれた釣りクラブの人たちは釣れず奥山氏の腕がひととき目立った。このときほど釣りを難しいものと感じたことは無かったし、今後も無いと思う。最終日の午前中に会った釣りマニアの言葉通りの場で釣りをしたらニジマスは釣れてもマクロステイグマは釣れる筈の無い場であったのだ。奥山氏の周到さとプロとしてのすごさを感じる一日であった。彼が苦労しているのを理解

せず、釣り道具を借り標本を増やそうと試みたが彼が大切にしていたルアーを木の枝に何本も引っかけてドジを踏み、迷惑を掛けるのはもちろん井田であった。そんな訳で最終日に漸く彼が披露し終わったのは日もとつぷり暮れたころであった。彼が苦労して釣り上げた魚は私は図々しくもらい受け、標本が増えたことを一人ほくそ笑んでいた。そんな苦労を続け漸く奥山氏は取材に協力できた。一方、のうてんきな私は研究室で何が展開できるかを思うと一人でニヤニヤとしてしまうほど嬉しがつて帰路について。ここで皆様に忠告。地中海には魚が少ないので、数を希望する方の釣

りには向いていない。エーゲ海の青さは豊饒の海では無く、生物的貧困さの証であることを念のため付言する。

釣り紀行の取材ということで自分の研究素材、学生諸兄の材料を得る

またとない機会を与えて下さった奥山氏に改めてお礼を申し上げたい。彼には申し訳ないが自分自身には分類学を改めて見直す有意義な楽しい日々であった。

小林先生新たな出発を祝う会



中村 義幸 (旧姓府録) (10A)

同窓性の皆様、お変わりございませんか？

水族病理学研究室教授として、昭和四十八年に第一期生を三陸に迎えて以来、二十四年間にわたりご指導賜りました小林正典先生が、本年三月末日をもちまして定年退職されました。水族病理学研究室OB会では、先生の長年のご恩に報いるべく、四

月五日(土)に白金の北里学園本館におきまして、「小林正典先生の新たな出発を祝う会」を開催いたしましたので、ここに御報告させて頂きます。

当日は、小林先生の奥様をはじめ三陸から厚田静男先生も駆けつけて下さいました。また、全国各地より研究室OBはもとより、研究室に出

没(?)していたいわゆる「隠れ病理」OBの参加も多数あり、総勢八十名と大盛況でした。

午後三時からの「千秋楽特別講演」では、中国及び台湾に於いて水産事情をスライド上映を中心に、ユーモアを交えた小林節の名調子で講演され、時間が経つのも忘れて、出席者も久しぶりの学生気分ひたつておりました。講演終了後、小林先生御夫妻には花束・記念品の贈呈が行われ、参加できなかった方々からの祝電披露がありました。

つづきまして、厚田先生の御挨拶があり、長屋信博三水会会長の乾杯で祝宴に入りました。先生のまわりには、人垣と笑顔が絶えず、学生時代のエピソードや社会に出てからの近況報告等で、肩が触れあう混雑ぶりでした。卒業以来はじめての再会を喜ぶOB同士の姿もあちこちで見られ、さらには若いOBに、最近の三陸事情を訪ねるなど世代を越えた交流がはかられ、有意義なひとときをすごしました。

終宴にあたり小林先生より、今までを振り返りつつ心のこもった「おことば」がありました。時折遠くをみつめるように、思い出をかみしめながら語りかけて下さる古武士然と

したその御姿から、水産をとりまく環境保全・資源保護にかける情熱と、我々に対する期待が参加者全員に伝わりました。奥様からも、どうしても……と言う事で、心温まる御礼が述べられ、我々も恐縮する一幕もありました。

最後に、円陣を組み「水産放浪歌」を高々と歌い、御開きとなりました。二次会は、目黒の雅叙園にて行いましたが、当初の予定よりも参加者が多く、急遽一部屋追加をしてその場をしのぎました。その後については、皆様のご想像に任せたいと存じます。

さて、先生が第三の故郷に選んだ北アルプスの麓、長野県松川村は、「すずむしの里」とも知られ、天然ラドン温泉の熱を利用した鈴虫の飼育施設があり、さらには、メルヘン調の画風で知られる画家、いわさきちひろの「安曇野ちひろ美術館」もあるそうです。今度の冬には、長野オリンピックもひかえております。皆さんも、流動食(般若湯?)を片手に信濃路へ足を運んで見ませんか。

最後になりましたが、今回、幹事役として皆を引き合わせて下さいました長谷川一敏(3A)・石井美華



収支計算書

単位：円

支 出		収 入	
科 目	金 額	科 目	金 額
1. 祝賀費	245,225	1. 小林教授寸志	30,000
2. 二次会補填代	56,000	2. 会費収入	720,000
3. 交通費	68,600	3. 三水会助成金	30,000
4. 講演会費	50,454		
①OB印作成費	(17,510)		
②看板代	(3,000)		
③写真代	(4,717)		
④文具代	(14,727)		
⑤花代	(10,500)		
5. 祝賀会記念写真代	10,000		
6. 通信費	9,300		
7. 小林教授記念品代	310,000		
8. 研究室記念品代	30,421		
合 計	780,000	合 計	780,000

(4A) 両先輩に感謝申し上げますとともに、同窓生各位の御健勝と御活躍を御祈り申し上げます。

小林先生の新住所
〒三九九一八五 長野県北安曇郡松川村字東松川五七二一 番地 一六三〇
TEL (〇二六一) 六二一九八〇八

平成九年度関東地区親睦会に参加して

「我が家のす立て騒動記」

高橋利明 (4A)

平成九年八月二日午前五時半。我が愛車に父、母、妻そして二男を乗せて意気揚々と出発したものの、予想以上の渋滞にはまり、三十分遅れの八時半、ようやく集合場所の木更津静養園に到着。案の定、既にロビーに同胞の姿は無し。幸いにも、我々だけのためにもう一台マイクロバスを出してくれるという。ありがたや！急いで荷物をまとめバスに乗り込む。ようやくホッと一息をつき、心地好い潮風を味わっていたら、突然、眼前に砂浜が広がり、「す立て」が、そしてその沖に参加の皆さんが乗っているとされる船が二隻眼に飛び込んできた。遅刻したために船着き場ではなく直接イベント会場に來てしまったのだった。ふと脇を見ると、何と、最近寄る年波に動きが鈍りがちになってきている生来せつちかな本年とつて七十六歳による我が制作者(従)は、野生の本能が目覚めたのかいつの間にか海パンイッチョになり、今にも海に飛び込もう

として、同制作者(主)にたしなめられている。既に、かなり潮はひいて「す立て」が始まりそうだが、とりあえず、本位と合流すべく小舟で送ってもらうことにする。約五分後、三年振りで懐かしい同胞の笑顔に迎えられる(中に多少叱責の声有り)。早速、小林先生を中心に腰据え呑みモードに突入している幹事の和に入り、再会の祝杯を呑み干す。ううまい!!。天気もほんとの薄曇りで風も適当にあり、文句なしの海水浴日和になった(幹事の皆様の精進の賜物です、感謝感謝)。程なく、す立て内の「エイ」チェック(過って刺を踏んだらこれ大変!)が終わってゴーサインがでて一同一斉にす立てに向かった。このまま、呑み続けようかとも思ったが、狩猟本能には勝てず、急ぎ皆の後を追う。網の中には、網に入り慣れた、日焼けしたタ イ他が泳いでおり、子供達が歓声を上げて追い回している。同様に、両手でタモ網をしつかと握っている我

が制作者(従)も野生の血全開でタ イを狙っている。思わず絶句。後から肩を叩くと、自慢げに魚の入ったプラスチックの樽を指差し、元氣な笑い声で身振り手振りを交え、すくった状況を説明している。見ると、七十センチはありそうな見事なスズキが、そこにはいた。そして、少し真面目な顔になり、「大物賞はないのかな?」と心配している。また絶句。そろそろ船に戻って呑み直そうかとす立ての外に出る。ふと、我が手を見ると、持ち込みのタモ網をしつか握っていた(何で、何で、オレ、マイたも網なの!!)。その時、ンツ。足元を何か黒い陰が横切った。しばし追いかけて、支柱についた海藻に頭を突っ込んで安心したその魚をサツとすくうと、それは三十五センチはあるタイであった。どうやって網を抜けてきたのかな、随分黒いなと考えるが良くと見ると、何と!クロダイ(天然)。血は争えない。素直に納得。

十一時半、待ちかねた楽しい豪華な昼食タイムとなり、赤ちゃんからお年寄りまで、ワイワイガヤガヤ、賑やかにご馳走を平らげている。恐る恐る「ひよっとして〇〇さんですよね」「エッ!」という話も聞こえる。一時過ぎ、静養園に戻り、す立て内の砂に隠されていた「シルバースェル」を見つけた方々へのラツキー賞の授与等行われた。最後に、幹事さんの暖かい計らいで我が制作者(従)は思いがけなく念願の「大物賞」を頂き、我が家族大満足で帰路につきました。

幹事の皆さん、静養券の関係者の皆さん、思い出に残る楽しい一日を本当に有り難うございました。

まだ、一度も参加されたことの無い皆さん、御無沙汰の皆さん、来年は是非参加されては如何でしょうか。



高橋さん(左)と御父様

「平成九年度総会開催」

去る五月十八日（日）午前十一時より、白金校舎会議室において、平成九年度本会通常総会が開催され、本年度の事業計画、予算等が審議、決定されました。総会は、代議員本人、二十八人、委任状出席十一人の計三十九人の出席のもとに開催され、八年度事業報告、決算についての報告をうけ、これを承認した後、会報の発行、全学同窓会講演会の開催等を内容とする平成九年度事業計画、予算案について協議を行い、原案どおりこれを承認しました。また、新代議員・役員の専任を行いました。総会において承認された昨年度の決算、本年度の事業計画・予算、代議員、役員は次のとおりです。

平成九年度事業計画

一、会報の発行

同窓生の同行、学部の実況、各種の情報等を内容とした会報を二回発行する。

二、「水産学部だより」の配布

本学水産学部の発行する「水産学部だより」を増刷し、全会員に配布する。

三、会員の現況の把握

全学同窓会と連携し、不明会員の調査等名簿情報の正確性の向上に努める。

四、同期会等の助成

同期会、講座別同窓会等卒業生の集会の費用の一部を助成する。

五、親睦会の開催

関東地区会員を主な対象とした親睦会を八月に千葉県富津市において開催する。

六、懇談会の開催

大学、水産学部在学生との懇談会を開催し意見交換を行う。

七、学友会助成

クラブの活動費および大学祭、体育祭費用の一部を助成する。

八、就職ガイダンスの開催

各分野の卒業生による就職ガイダンスを水産学部生を対象に三陸校舎にて行なう。

九、漁船海難遺児育成会寄付

漁船海難等により親を亡くした子弟に学費の援助を行っている漁船海難遺児育成会に対し寄付を行う。

見たい 知りたい 話したい

○北里大学同窓会奨励基金の募集および応募について

1. 第4次募集

期 間：平成9年10月1日～12年9月30日

金 額：1口 10,000円

2. 第9回 若手研究者研究奨励金の応募

応募対象学部：医療衛生学部・理学部・獣医畜産学部・水産学部の卒業後15年未満までの個人研究者

奨 励 金：1件 30万円

応募締切日：平成10年1月31日

なお、応募要綱は北里大学同窓会会報 第42号をご覧ください。

（応募用紙は同窓会事務局にあります）

（電話：03（3446）7309・7383）

平成9年9月9日発行

編 集 者 川 添 一 郎

発 行 三水会（北里大学
水産学部同窓会

事 務 局 〒246 神奈川県横浜市瀬
谷区瀬谷5-22-1石井方
☎045-303-3135

振替口座 第一勧業銀行
大手町支店
008-1182388

○訃報のお知らせ

山中龍一さん（H9、3、卒業）、増殖学科、水族病理学研究室がH9、9、3、事故で逝去されました。謹んで御冥福をお祈り申し上げます

編集後記

三水会会報 Vol.1 から編集を担当されておりました、大野良樹さんから受け継ぎ、Vol.34 から担当させていただきます。川添一郎です。宜しくお願い致します。

「見たい、知りたい、話したい」のコーナーでは、会員の皆様の御意見、御質問、また、お知らせを掲載したいと思います。御利用下さい。